

令和元年度 【 学園研究費助成金< B > 】 研究成果報告書

学部名 人間関係学部

フリガナ ミウラ タカヒロ
氏名 三浦 隆宏

研究期間 令和元年度

研究課題名 生殖と出生の概念の哲学・倫理学的研究——反出生主義の観点から

研究組織

	氏名	学部	職位
研究代表者	三浦 隆宏	人間関係学部	准教授
研究分担者			
研究分担者			

1. 本研究開始の背景や目的等 (200字～300字程度で記述)

夫婦による自然な性交＝「生殖」というこれまでの人類史において自明とみなされてきた関係性は、いまや体外受精や精子提供、代理出産などの生殖補助技術の絶えざる進歩と普及によって、性交を介さない「生殖」が一定数を占めるなど、崩れ出しつつある。また、世界では人口（の増加）問題が無視できない難題となっており、「出生」を哲学的に問い直す著作や論文も現われ始めている。このようにもはや「自然」なものと見なすことが難しくなりつつある生殖と出生の概念を、哲学・倫理学の観点から、また公共的な対話（パブリックエンゲージメント）という手法を取り入れつつ再考することで、両者の基礎づけを図ることを本研究の目的とした。

2. 研究の推進方策 (300字程度で記述)

以下のような手順による文献研究と公共的な対話の実施の両面で研究を進めた。

- ベネターの著作『生まれてこないほうが良かった 存在してしまうことの害悪』を精読し、反出生主義の立場やその理由を把握するとともに、シオランやショーペンハウアーらなどの（反出生主義に関する）関連文献を収集し読解する。
- アーレントの「出生 natality」の概念を論じた国内外の二次文献を収集し、それらを読解することで、彼女の「出生」の概念がいかなる射程を有しているのかを検討する。
- 生殖補助技術の利用者や精子提供で誕生した人々らの手記を読み解きつつ、1と2で得た知見をも踏まえて、「生まれる／人を誕生させる」とはどういうことなのかを、哲学・倫理的に、また哲学カフェ等の公共的な対話の場を設け、一般の人々らと意見を交わし合いつつ、考察する。

3. 研究成果の概要 (600字～800字程度で記述)

研究期間中に刊行された『思想』の5月号が「生殖／子ども」という特集を、また『現代思想』の11月号が「反出生主義を考える 「生まれてこないほうが良かった」という思想を考える」という特集を設けていたことから、両雑誌に掲載されている諸論考を精読することで、「生殖」と「出生」の現状、および基本的な論点をサーヴェイした。

また、5月18日にカフェティグレ伏見店で「子作りは害悪か？」と題する哲学カフェを実施したところ、自らを「反出生主義者」だと名乗る数名の若者らが集まり、彼／彼女らの意見を聞くことで、当初の予想以上に「反出生主義」の思想が若者らのあいだに浸透しつつあるという実感を得るにいたった。また、ベネターの『生まれてこないほうが良かった 存在してしまうことの害悪』や川上美映子の『夏物語』の一部を演習の授業で学生らと講読することで、受講者らから「自分自身が子どもをもつことについてどう思うか」という点や、「反出生主義の興隆をどう考えるか」という点について、対話をしながら考えた。

あわせて、アーレントの「出生」概念を扱った論文を読み進めたり、ハンス・ヨナスの『責任という原理』の責任概念やシオランやショーペンハウアーらの思想をする参照する作業を並行して行なった。

研究期間中に新たに書評その他の依頼仕事をいくつか引き受けたことや、現在編集を進めている『アーレント読本』の原稿チェック等に時間が取られ、成果としての論文を発表することはできなかったが、私が会長を務める日本アーレント研究会の春の大会で「生まれること」を考える」というシンポジウムを開催する予定であり、また来年度の生命倫理学の講義において本研究で得た知見をも題材として扱うなど、研究・教育の両面で今回得た成果を徐々に表わしてゆく予定である。

4. キーワード (本研究のキーワードを1以上8以内で記載)

① 生殖	② 出生 natality	③反出生主義	④ アーレント
⑤ ベネター	⑥	⑦	⑧

5. 研究成果及び今後の展望 (公開した研究成果、今後の研究成果公開予定・方法等について記載すること。既に公開したものについては次の通り記載すること。著書は、著者名、書名、頁数、発行年月日、出版社名を記載。論文は、著書名、題名、掲載誌名、発行年、巻・号・頁を記載。学会発表は発表者名、発表標題、学会名、発表年月日を記載。著者名、発表者名が多い場合には主な者を記載し、他〇名等で省略可。発表数が多い場合には代表的なもののみ数件を記載。)

・『生きる場からの哲学入門』大阪哲学学校編、新泉社、2019年8月、(第I部第二講「砂漠のなかのオアシス——沖仲士の哲学者ホッファーに学ぶ、生きる場で哲学するためのルール」(57-77頁)を担当)

・書評「古田徹也『言葉の魂の哲学』講談社選書メチエ」、『社会と倫理』第34号、南山大学社会倫理研究所、137-141頁、2019年12月

・書評「入谷秀一『バイオグラフィーの哲学——「私」という制度、そして愛』ナカニシヤ出版」、『倫理学研究』第50号、関西倫理学会編、2020年6月(刊行予定)